

## 京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

### 1. 研究課題

書簡的エクリチュール——ヴァレリー研究の新たなる展開にむけて

Epistolary Writing: For the Development of New Studies on Valéry

### 2. 研究代表者氏名

鳥山定嗣

TORIYAMA Teiji

### 3. 研究期間

2019年04月 - 2020年03月 (1年度目)

### 4. 研究目的

ポール・ヴァレリー(1871-1945)についての研究はこれまで作品および『カイエ』に重点が置かれてきましたが、近年あいつぐ伝記や書簡の刊行によって、ヴァレリー研究は大きく様相を変えつつあります。本研究の目的は、そうした新たな研究動向にそって、青年期の友人(ジッドやルイスなど)との書簡、またヴァレリーの後半生を彩る女性たち(ポッジ、ヴォーチエ、ヴォワリエなど)との恋愛書簡を読むことにより、「テスト氏」や「純粹自我」の概念に代表される主知主義的かつ自己充足的な作家像とは異なるヴァレリーの姿、すなわち青年期から最晩年まで、同性／異性、友人／愛人の相違はあれ、「他者」を希求しつづけたヴァレリーの「自己」のあり方を問い直すことです。特定の他者との間に交わされる「書簡」は、不特定多数の読者に向けられる「作品」とも、孤独な精神の日記「カイエ」とも異なる独自のエクリチュールであり、その特質を探ることは、作者・書かれた物・読者という三項関係のもとで「書く行為」について再検討する意義もあると考えます。

The studies on Paul Valéry (1871-1945) which have focused on his Works and Notebooks (Cahiers) are now showing signs of significant change with a series of biographies and correspondences recently published. Considering this new trend in Valéry's studies, our research aims to show a Valéry, far from the stereotypical, intellectualist or self-sufficient image, as represented by his creature "Monsieur Teste" and the concept of "Moi pur (Pure Ego)". By reading Valéry's letters sent to friends of his youth (André Gide, Pierre Louÿs) and to lovers appearing in the second half of his life (Catherine Pozzi, Renée Vautier and Jeanne Loviton, alias Jean Voilier), we will examine the "Self" of a man who cannot help writing to "Others",

friends or lovers, throughout his life. Epistolary writing, addressed to a specific person, differs from Works destined for the general public but also from private Cahiers, a kind of solitary mind's Diary. The specificities of epistolary writing will thus lead us to a reexamination of "the act of writing" in terms of the triple relation between Writer, Text and Reader.

## 5. 研究成果の概要

9月の研究会では、アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリーが交わした『三声書簡』のなかで、特にルイスとヴァレリーの関係および「世紀末文芸誌」に関する議論について新たな知見が得られた。また細部の読解や共同翻訳についても話し合うことができた。12月のシンポジウムでは、ヴァレリーが青年期から晩年にかけて愛する女性にしたための「恋愛書簡」を共通テーマとして各発表者がそれぞれの視点から研究発表をおこなった結果、ヴァレリーの「恋愛書簡」が単に恋愛の問題に限られるものではなく、この作家の作品読解から後年のマラルメ論や回想録、さらには「作品」とはそもそも何かという根本的な問いにいたるまで、広範な問題系と関わりのあることが示された。研究発表後には会場との質疑応答もなされ有意義な場となった。上記シンポジウムの論文集は3月に水声社から『愛のディスクール——ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』（森本・鳥山編）として刊行した。

## 6. 共同研究会に関連した公表実績

森本淳生・鳥山定嗣編『愛のディスクール——ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』、水声社、2020年3月

## 7. 研究成果公表計画および今後の展開等

2020年3月に成果報告論文集『愛のディスクール ポール・ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』を水声社より刊行。